

教材分析のための破格論（Ⅱ）

— 60年代新ファース派の検討（上） —

塚 田 泰 彦

1. はじめに

文体というものを記述可能な対象として固定するにはどうすればいいか。この問いに対する答えの一例を、前回60年代の変形文法の手法に求めた。統語論レベルで一つの規範となる文法が想定され、その規範文法からの逸脱の様相を以って、文体的変異としてこれを記述する方法は、文体というものを規範からの逸脱の様相と定義する伝統的な文体観にとって、有効な客観的記述の成果として受け入れられた。詳細な論議では多くの問題を抱えてはいたが、規範を具体的に設定することの困難さの前に立たされていた文体研究者にとって、これは瞠目すべき成果であった。また恐らく、我々の一般的な想念の中にある文体の線条性に照らして、この統語論レベルでの分析はかなり生き活きとした関与性を有するものに見えたはずである。

しかし、文体（文体的変異）というものを記述することと、その変異の働き（効果）を説明することとの間には、予想を遥るかに越える距離のあることも同時に理解された。文体研究の本来の目的は、仮え一般的な文体の型であれ、個人的な文体的変異であれ、それを記述することがそのままその効果の意味を解釈することであったからである。R. オーマン¹⁾は、旧来の文体概念を12種に分類し、変形文法活用の文体分析が如何に旧来にない有効な方法であるかを論じたが、形式的な操作を前提にするこの方法では、意味の領域に踏み込んでその文体の効果論を論じる場合も、自ずから心理的・生理的效果を論じることになり、そのテキストの内容とは殆ど関与性の薄い段階での発言に終始せざるを得なかった。そこで、或るテキストの内容や状況を分析するための過程的手法としてのみこれを活用し、文体というものをそこから引き出そうという目的を一旦捨てるか、さもなくば、テキストという固有の現象の分析を離れ、抽象的な操作によって、多くの文体的変異を生成することで文体の多様な効果（価値）を査定するか、選択の道は二つに一つであった。そして、この派の60年代の論文は、前者を選んだのである。

本稿のテーマは、同じ60年代に、意味（meaning）、文脈（context）、機能（function）、範疇（category）といった概念を理論の中核に据えた新ファース派の文体論的研究が、この同じ問題にどう取り組んだかを検討することである。

M. A. K. ハリデーを中心とするこの派の言語理論は、単位（unit）、構造（structure）、類（class）、体系（system）という四つのカテゴリーの相互の関係を満たしながら、言語現象の背後に常に機能的なるものを探っていく。そのため、変形文法の統語論レベルでの文体分析への応用例のように、単一なレベルを切り取って、そこに説明のまとまりを与えようとするこ

とは難しい。だが、そうであればこそ逆に、この派が一步進んだ文体的変異の効果についての説明力を有することも可能となるのである。N. E. エンクヴィストは、この派の60年代の成果を振り返って、こう述べている、「ハリデーのモデルは、さらに文体研究には実に有効ないくつかの別の概念 (scale, cline, delicacy) を含んでいる。これはまた選択 (choice) の問題にも有効である。変形文法では、全ての選択は通常単一の体系へと組み立てられ、それはごくわずかの構成要素に分けられる。これに対し、ハリデーの `scale-and-category` (尺度と範疇) ないし `systemic grammar` (体系文法) では、関係付けられた選択がそれ自体の副体系へと組み立てられる。実際の応用では、このことが、変形モデルよりも、より必要な副体系を或る体系モデルから引き出し易くする、即ち、それ自身をより拡大された恐らく稀薄な考察に引き込まなくとも、一つの全体として適切な副体系を使うことが出来るということである。また、ハリデーの理論では、他のモデルでは包括することが困難と思われる、殊に他動性 (transitivity) や主題 (theme) といった、言語のある基本的な分野が統合されている。これらの諸概念は、文体言語学 (stylolinguistics) に益々関与するいくつかの分野 (殊にテキストのコヒージョン cohesion) における仕事を刺激することになった。」²⁾

ここでは、この派の言語理論のそうした全体性を踏まえて、次の二点から論を展開する。一つは、60年代に書かれた文体分析に関する論文が、その理論的背景との関係でどう要約されるか、もう一点は、文体を破格 (偏差) として据えることがこの派の研究においてはどう位置付けられているか、である。特に後者は、言語学的文体論 (linguistic stylistics) として一括される諸学派の成果を、`破格論` として検討しようとするこの一連の論考の統一的視座である。最初にこの新ファース派の60年代の破格観に言及し、次にその要点の一つ一つが具体的にどう展開されたかを見て行くつもりである。

2. 新ファース派・1960年代の破格観

`テキスト` は操作を経た言語の統一体であり、文体研究が成立するための関与的な一統合単位である。仮にそれが何らかの断片であるとしても、テキストと認める限り、この種の統一性を前提にせざるを得ない。というのも、テキストが存在するためにはその実質がメッセージとして伝達されねばならないのであり、この程度の意味において、それは一つの伝達単位としての統一体なのである。だが、このテキストの言語的統一性は、作品としての統一性とは区別されなければならない。なぜなら、テキストの言語的統一性は、言語の諸様相の個々の機能によって保障されるものであって、一体に文化的背景やメッセージ自体に還元することによって支持されるものではないからである。そして、こうした判断を基盤にして始めて、我々はテキストの内的機能というものを言語学的視座から分析・検討することが出来るのである。

もっとも、この区別は或る意図をもって成されたものである。例えば、ハリデーは、形式意味 (formal meaning) と文脈的意味 (contextual meaning) を区別する³⁾ が、形式項目間

に存在する関係（＝形式意味）を指して、テキストの言語統一性を構成しているものと考えている訳では勿論ない。それは、彼がファース流に、形式と意味を峻別しない理論的前提に立っていることから明らかで、むしろハリデーの意図は、この抽象的な形式に意味のレベルを一つ認めた上で、文脈の意味を支える非言語的現象（実質）との関連を問題にしようというところにある。即ち、それが言語的テキストである限りにおいて常に文脈の意味は形式意味によって支持される、換言すれば形式意味は常に文脈の意味に優先すると考えるのである。こう考えるとき、形式意味がテキストとしての言語的統一性を保障しているものとなるのである。

ハリデーはこうした判断に立って、様々な観点から、形式と意味の橋渡しを試みる。先に挙げた四つのカテゴリーのうち、単位と構造はシンタグマティックな関係に係わる文法的カテゴリーであり、類と体系はパラディグマティックな関係に係わる文法的カテゴリーであるが、この四つのカテゴリーを有効に組み合わせながら、かつまた様々な階層（levels）をデリカシー（delicacy）という概念を以て活性化することによって、文章の生成（意味の形成）状況を説明しようとするのである。これはまた、或るテキストに生じる文体やパターンを様々なレベルとカテゴリーから再構成する形で説明しようということでもある。その場合、一つのパターンを取材するに当たっては、レベルとカテゴリーを指定すると同時に、そのパターンの成立する尺度（scale）を決定することもまた研究課題となる。詳細は後に譲って、ここでは、次のことを確認したい。

少なくとも、文体やパターンという概念は、一定の抽象性のレベルを必要とするもので、さもなくば莫大な数の文体を現実のテキストから列記せざるを得ない。エンクヴィストが言うように、問題は文体を記述するための最も適切な抽象性のレベルは何かということになるのである。彼はこう述べている、「我々は最も重要でメジャーな文体的カテゴリーの二つ三つを記述すべきなのか、それともより大きなデリカシーで、莫大な数の文体を記述すべきなのか。仮に文体をテキスト規範との間の`density comparisons（密度の変化）'の結果とみるなら、可能な文体の数は無限であり、テキストと規範の可能な組み合わせの数に依存することになる。この意味で、`文体'全てを一つの文法で記述することは恐らく不可能であり、研究者はその特定の目的のために、規模縮少の観点を何処に置くかを決定せざるを得ない⁴⁾」。

そこで、まず、文体やパターンを考察するために、即ち一定のレベルで言語の特性を固定するために、`規範'を二つのレベルで区別して考えてみよう。例えば、前回紹介したS. R. レヴィンの分類⁵⁾をみてもわかるように、規範として考えられるものには、1) 言語の機能的側面として設定可能な規範（文法や音韻の構成など）と、2) 言語活動の様相を形成する背景（background）の二つである。破格分類の混乱は、主にこの二種の峻別を怠ったところから生じるものである。ここでリーチの分類した破格のタイプを列記するが、彼の分類もまた、その明解さの割にはこの種の分類上の根拠の曖昧さを免れてはいない⁶⁾。そこで、ハリデーを中心とするこの派の破格観に言及する糸口が何処にあるかを確認するためだけに、この分類を引用しよう。

(G. N. リーチの分類)⁷⁾

1. Lexical dev. (語彙的逸脱)
2. Grammatical dev. (文法的破格)
3. Phonological dev. (音韻的偏差)
4. Graphological dev. (筆蹟上の差異)
5. Semantic dev. (意味論的逸脱)
6. Dialectical dev. (方言的偏差)
7. Dev. of register (言語使用域の逸脱)
8. Dev. of historical period (時代的差異)

この分類項目のうち、この派の特徴・成果を最もよく示すものは、7. の項目である。もっとも、このレジスターは、曖昧な概念で、さらにそれを規定するものとして、field, mode, tenor (style)⁸⁾ の下位分類がある。この三つは、ディスコースを文脈的パラメーターによって分類するときの項目である。文脈を重視するこの派にとって、こうした形で文脈を分類し、固定することは、そのまま或る程度文体の問題を固定することであったし、'ディスコース'の考え方が、この頃から言語学上の主たる研究テーマの一つになったことも影響したのであろう。ただ、この分析作業の途次、どんな様相が文体論的に関与的かまた非関与的かを決定しなければならない訳で、その判断は、具体的なテキストの考究と、恐らくさらにデリケートな下位概念を必要とすることになる。この7. の項目一つをみても、60年代のテキスト分析では、まだそこまでの成果は期待できないのである。

破格の問題に視点を移すために、このリーチの8つの分類項目を、各々テキストの逸脱状況を説明するための'規範'と考えてみると、例えば、2. の項目なら、いかに'文法'を規範として整備するか、3. ならば、音韻のレベルでいかにその言語音の規範を設定するか、7. なら、field, mode, tenor, 各々における差異をどう記述するか、が問題となる。この作業は、一方で、言語の諸様相が、この派の言語理論によっていかに適切に体系付けられるかに係わりながら、'記述の妥当性'を追求することになる。だが、この方向での記述は、抽象性の度を低め、限りなく微細、煩雑なものへと向かわざるを得ない。先に触れたように、文体記述の可能性の要点は、抽象性のレベルを何処に置くかということなのである。そこで、リーチが示したような分類及びその記述を、言語学的文体論の基礎作業とみなして、一般的な'背景'としての規範の問題に視点を移すのがいいように思われる。それは或る意味で、破格の検討がそのままそのテキストの解釈の手段となるより抽象的なレベルとは何かに、一つの判断を与えてくれるだろうし、また、これは、多少思弁的な判断を含みつつも、常に'テキスト解釈のための破格の位置付け'の中心問題を形作って来たのである。

こうした観点から、文体・破格の問題にアプローチするこの派の考え方を据えようとするとき、パターン (pattern), 規則性 (regularity), 卓越性 (prominence), 前景化 (foregrounding) といった概念は欠くことの出来ないものである。以下では、まず大きく

破格についてのこの派の立場を押えた上で、これらの概念を巡って、検討を加えたい。

① Deviation (破格, 偏差, 逸脱)

先にも述べたように、破格は、明確に記述され得る規範Aが存在するときに「規範Aからの逸脱」として記述可能となるが、この「規範」を明確に設定することが困難であるという点、もう一つは、規範Aを設定したとしても、それは別の規範Bからの逸脱である可能性を常に持っている点、この二つの点で問題の多い概念である。

例えば、用法として最も異常性の度を明確に示すものは「隠喩」である。しかし、隠喩も常用されると「dead metaphor」になってしまう。そこで、この間の事情を説明するためには、もはや心理言語学的方法に頼ることが適切な判断を与えてくれるように思われるかもしれない。事実その分野での研究は進んでいる。しかし、勿論こうした判断は、隠喩の生成についての認識方法の説明でしかない。作品におけるその一つの逸脱の位置・機能を説明するのではなく、より直接には、作者の意識や読者の理解過程を説明しているのである。これに対し、言語学的文体論は、テキストの一つの言語的事実を、その全体としての言語の状況との関係で論じながら、そのテキストの固有性や、そのテキスト全体における或る言語的事実の位置関係・機能・効果を論じるものである。

この立場に立って、「破格」というものに対する、我々の基本的な認識を、ここでもう一度次のリーチのことばによって、確認しておこう。例えば、詩の言語について、「本質的に言語に詩的-非詩的の区別があるという感覚は受け入れ難い」、しかし「一方では、詩的言語はその時代の「日常語」と充分密接ではあり得ない⁹⁾」のである。このリーチの発想の原点が、手段としての言語そのものには何ら個々の特異性を認めず、その使用において、あらゆる言語状況を理解・説明しようとするところにあることは明らかである。

では、この派は、言語の逸脱状況の説明のために、規範の問題をどう位置付けているのであろうか。結論を先に述べれば、この派は、60年代の変形文法派のように、規範そのものを明確に設定する作業を第一の目的にはしていない。むしろ、一つのテキスト(発話)が、どういう様相・機能によって組織されているかを分析することがテーマなのである。先のリーチの破格分析についても、規範からの逸脱として破格を論じることに主眼があるというよりも、分類した各様相が、その使用において、その様相で、効果的な現われを組織するにはどのようなパターン化が可能か、を検討していると見る方が適切であろう。

エンクヴィストは、文体研究における文法性の問題について、次の二つの観点を挙げている。

1. 或るテキストは、適格性の日常の規範から逸脱することでその文体的効果を挙げる。仮に言語的規範をもとにその文体を記述するとしたら、通常の規範から逸脱可能なその方法の記述理論が必要である。
2. 定義上は、あらゆる文体は、適格性の規範的パターンからだけでなく、他の文体からの、文脈的に定義可能な規範からの「逸脱」として眺められるべきものである。¹⁰⁾

ちなみに、変形文法派の研究は、1. に、新ファース派の研究は、2.に、各々その中心があると考えられる。

② Regularity (規則性), Pattern (パターン), Prominence (卓越性), Fore-grounding (前景化)。

ところで、逸脱が逸脱として捉えられるには、それを逸脱と判断出来る何かが存在する。勿論その場合、規範によってその逸脱状況を指示・記述することと、その逸脱がもつメッセージとしての意味を理解することとは、別のことである。換言すれば、逸脱は逸脱のままでは了解(伝達)されないのであって、逸脱がその意味を伝達されるためには、何らかの別の‘規則性’によって捉え直されることが前提となるのである。この‘規則性’は文法構造といった言語の規範とは区別されるべきもので、それは、例えば、いわゆるメッセージがそれ自体に集中する伝達可能な論理や形式を組み上げる場合の、論理や形式である。R. ヤーコブソンの詩的機能の定義としてよく知られるように、メッセージはそのメッセージ自体に集中する何らかの構成・機能を有しているのである。テキストに見い出される言語の‘パターン’は、その具体的な一例である。今、この種のメッセージの構成要素を取材して、逸脱状況を説明しようとするとき、或る規範からの逸脱は、他の‘規則性’へと編入されて始めて理解されるのだという観点を見失うことは出来ないのである。ハリデーは、こう述べている、「仮に、どんなレベルであれ、それ自体として言語の厳密な固有性である組織化を、全て、一般的・非専門的な用語である‘パターン’という語で呼ぶなら、文学言語の特定の固有性は、こうしたパターンの変化性(variability)のパターン化である。換言すれば、創造的な作家は、パターンが許容する‘規則性’を発見し、探究するし、そうすることで、さらなる‘規則性’を uploads するのである。我々がこの語(規則性)に計量的解釈を与えないという条件付きで正当にこの語を呼称するとき、‘メッセージ自体に集中するもの’をマークするのが、この‘規則性’なのである¹¹⁾。

一つの規範を言語学的に設定し、その規範からいかに一つの破格が逸脱しているかを言語学的に記述することは、別の観点によってその破格を統合し、一つの‘規則性’として理解する(出来る)ための中間的作業であって、それだけでは独立した判断たり得ないという認識が、ハリデーにはある。テキストに現われる幾多の様相は、或る一貫性・規則性を了解出来るレベルに達したときに、一つの様相として認知される、という前提なのである。(前回取りあげた、‘通常ランダムにしか現われないものに一つの組織化の意識が働いて、破格は生み出される’¹²⁾と考えるS. R. レヴィンの見解¹²⁾と同様の判断に立っている。)

さて、この規則性については、1. 顕在的か潜在的か、という観点と、2. そのテキストの特徴を理解するのに有効な規則性かどうか、という観点がある。後者について、ハリデーは、「文学研究に益のない linguistic regularity と、詩や散文にとって有意義な linguistic regularity¹³⁾」の区別を設けている。

では、この‘規則性’との関係で、‘パターン’という概念はどう位置付けられているのだろ

うか。先のハリデーの引用からもわかるように、`パターン`は、特別に言語学的意味を有する用語ではない。言語現象の或るレベル、或る尺度での、一つの特徴ある形式の一般的名称なのである。これに対して、`規則性`という用語は、この`パターン`に言語学的判断の余地を加えたもの、という違いが認められる。即ち`パターン`は、それを言語学的記述に替えたとき、言語的特性としての`規則性`を示すのである。ただ`パターン`は、一つの言語的`規則性`をのみ有するものと想定することは出来ない。むしろ`規則性の複合したもの`と考えるべきものである。そして、こう考えるとき、一つのパターンを構成する幾つかの規則性の中から、一つ二つの規則性が破壊されることがあっても、相変わらず一つのパターンとして認識可能な状態を我々は維持できるのである。それはまた逆に、一つの規則性が、一点では不規則性(irregularity)としての効果(破格)を発揮しながらも、それがそれを許容するパターン内のものであれば、安定した認識・効果を約束する、ということでもある。そして、どの程度の規則性の破壊がそのパターンの破壊につながるのかを論じる余地もここから生まれて来るのである。

`パターン`と`規則性`という二つの概念を、以上のような形で想定することで、言語的逸脱としての不規則性を、了解可能性を前提にしたテキスト内での効果の説明に替えることが出来るのである。これはまた、テキストの複雑な環境から或る様相を孤立させ、それをより明確に眺めるための有効な作業仮説でもある。本来、「言語形成の研究は、言語が言語の内的構造を通じて、意味表現にコントラストをもたらす方法を吟味するものなのである。どんな特定の言語の形式の言語学的記述も、意味作用に役立つ選択の可能性が存在するところのその言語パターンの位置の分離(isolation)や、その言語の有意味な内的パターンの記述、なのである」¹⁴⁾。この取材されたパターンに、規則性という言語学的判断の可能性を付与することで、言語学的な規範(言語の機能的側面)と、テキストの様相を支える基盤即ち規範としての背景(テキストの形式的側面)を結び付けることが可能となるのである。

ところで、規則性もパターンも、それ自体には、テキスト中での顕在性や潜在性を区別する要件を与えられてはいない。即ち、顕在的であるか潜在的であるかは、これらの概念とは一応関係がないのである。では、テキストにおける言語的諸特性の顕在化・潜在化の区別に関して、この派はどのような考え方をしているのだろうか。この点、`卓越性(prominence)`と`前景化(foregrounding)`という二つの観点から見よう。

言語芸術作品としてのテキストを美的見地から捉え直したとき、そこに生じる言語的逸脱状況を考察するのに、`前景化`という一般原理が活用されることになった。ロシア・フォルマリズム以来のその成果を踏まえ、文学をこの`前景化`の一貫した体系的な性格によって区別しようとする研究¹⁵⁾を受けて、リーチはこう述べている、「言語的ないし他の社会的に受け入れられた規範からの逸脱は、`前景化`という特定の名称を与えられて来ており、これは、`後景(background)`に対して勘案される`フィギュア(形像)figure`のアナロジーを呼び起こす。芸術的逸脱は、その後景やオートマティック・システムから、ちょうど視野の背景の中での一つ

のフィギュアのように突出する（stick out）」即ち「前景化されたフィギュアが、言語的逸脱であり、背景は、その言語（当然‘逸脱’が問題にされる体系）である」¹⁶⁾と。

この説明からもわかるように、‘前景化’という概念は、言語学的特性を指すものではなく、我々のテキスト認識に照らして、その言語的破格が生み出すフィギュア（形像）を指すものである。結論的に言えば、テキストの言語学的分析の客観性と、批評的解釈の主観性とが適合すべき場所（事柄）として想定されているものなのである。また、この‘前景化’は、相対的な関係を表わす概念である。というのも、破格に様々の程度が存在する上、「多くの場合、様相Aをノーマルなものとし、様相Bを前景化されたものと眺めることによって、結局は絶対的な背景というものが存在しなくなる」¹⁷⁾からである。そこで、その前景化がいかなるものかを直接指示することを可能にするような、言語学的概念が必要になる。即ち、前景化はいかに言語学的に説明されるか、という問題がここに生じるのである。

ハリデーは、「私の理解では、前景化は、動機付けされた卓越性（prominence）であり」「全体としてのそのテキストの意味と関係する場合にのみ‘前景化’と言える」¹⁸⁾という。彼のように、‘前景化’を‘動機付けされた卓越性’に限定することは、次の点で重要である。

常に、潜在的－顕在的、規範的－破格的、無意図的－意図的、といった組み合わせで、一つの言語的様相はその現われを組織されるが、多くの場合、そのテキストの‘特定の情報’は、後者の形態を取ったとき、より我々の理解を促すものである。しかし、言語コードと一致したものが理解可能なものであると定義すれば、コードの破壊として前景化された様相は、その意味の理解を妨げられていることになる。この矛盾は言語表現の本質に根ざしているが、我々がテキスト解釈で度々会おう、この「意図的な曖昧性は、ただ一つの方法によって、即ちその詩人が二者択一の意味の平和的共存を意図していると想定することによってのみ、理解可能となる」¹⁹⁾のである。我々の実践的解釈におけるこの判断は、ハリデーの‘言語の顕在化した様相のうち、その言語的特性の分析によって、意図的な卓越性を認め得ないものは、前景化されたものと認めない’とする判断と同じである。ハリデーの見解は、我々の解釈上のリアリティーにその根拠を置くものなのである。

ところで、‘卓越性’という概念についてであるが、これは、破格という概念と違って、規範的であるかどうかの判断を必要としない。仮え、結果的に‘規範からの逸脱’が卓越性を示すことがあっても、この‘卓越性’は、相対的な関係概念の捉え難さを免れている。‘卓越性’とは、一つの実体を指す概念と考えていいのである。そのため、この概念を採用することで、破格という、‘規範との関係を抜きには考えられない問題’を、一応回避できるし、また、テキストの固有性が必ずしも破格によって生み出されるだけではない、という事実とも関与的である。作品によっては、言語表現としてはノーマルでも、充分独特のテキストたり得ていることが少ないからである。ハリデーの次のことは、この間の事情を語って余りある。「逸脱（departure）の観点は、奇妙さ（oddness）にあまりに高い価値を付与するので賛成出来ないし、規範的形式

が、文体研究に何ら有益でないことを示唆する。かくて、Wellek は言う、『言語学的文体論の危険性は、言語的規範からの逸脱及び破壊に集中するところにある。我々は一種の 'counter-grammar' 即ち放棄の科学を手にする事になる。規範的文体論は文法家に見放され、破格論的文体論は文学研究者に保有される。だが、しばしば、最も一般的で、最も規範的な言語的要素が、文学的構造の構成要素なのである』²⁰⁾」。

③ テキスト分析への上記4概念の活用について

以上、パターン (pattern)、規則性 (regularity)、前景化 (foregrounding)、卓越性 (prominence) という用語について、概略説明したが、これらの概念が、どのような展望の下に、テキストの言語学的分析に採用されているかを、ここで考えてみたい。

まず、②に引きつづき、卓越性の問題から話を展開しよう。ハリデーは、卓越性に関する論点として、次の三つを挙げている²¹⁾。

- a) 卓越性は、何かからの逸脱と考えるべきか、一つの規範の達成と考えるべきか？
- b) 卓越性は、どのような拡がりにおいて量的効果を持つか、また露わになるか、また少なくとも統計的に述べられるか？
- c) 主題内容に帰せられるべき卓越性と、その他に帰せられるべき卓越性との区別は、どの程度リアルであるか？

a) については、既に触れたように、言語学的文体論の当初からの争点で、この派にあっても、リーチはこの発想に傾き、ハリデーはリーチの判断の問題点を批評しながら、保留状態のまま別の観点を索めていると言える。「もし(文法論的、語彙論的または音韻論的)言語パターンを、言語の基盤となる機能と関係付けることが出来れば、我々は trivial なものを排除したり、統計的ないし絶対的な類のもの単なる卓越性から、真の前景化を区別するための基準を持つことが出来る²²⁾」、そして、そのためにまず、「卓越性というものを、(それが規則の破壊から成り立つと言われようが、規則の生成から成立すると言われようが、いずれにせよ)、量的な用語で表現される、即ち統計的概念が適用される一タイプの現象として扱うつもりである」²³⁾と、ハリデーは言う。彼は、規範の設定を目的にせず、言語の様相、殊にパターンを、言語の機能と結びつけることで、その働きや生成状態の分析を試みようと言うのである。そして、卓越性をb)の観点で研究するための理論的整備を行ない、具体的に量的・統計的判断を以って、そのテキストの卓越性を記述する。換言すれば、真にそのテキストの理解を促す固有の様相を分析するために、'前景化'されたものの言語学的説明に腐心しているのである。(例えば、c)についての理論的基礎付けについては、'観念化 ideational'、'個人間 interpersonal'、'テキスト的 textual' という三つの機能の分類²⁴⁾や、'他動性 transitivity' についての研究²⁵⁾が、彼の分析の一端を支えている。)

勿論、卓越性は言語学的判断の直接の対象であり、統計的判断の対象とする事も可能であるが、それに対し、前景化は一つのフィギュアである。即ち前景化は統計的には表現されないもの

である。そこで、この卓越性についての言語学的判断と、テキストの様相である前景化の説明との間には、相当の距離があることは言うまでもない。或るテキストにおいて、例えば項目Aが顕著な頻度を示したとする。しかし、高い頻度を示したからと言って、この項目Aがその作品の解釈に関与的かどうか、即ち識別特性として項目Aが有効かどうか、の保障は何もない。とは云え、或る特定の様相が卓越的であるような場合、何らかの量的異常はありそうだし、時にはそれがその作品にとって非常に暗示的であったりするかもしれない。要は、一つのテキスト中の多くの様相から、そのテキストの特徴として文学的立場から有効な判断を加え得るような、真に動機付けされた卓越性を選択することが問題なのである。そして、その場合、さらに、この統計的に抽出された‘動機付けされた卓越性’の言語学的記述を通して、‘前景化’の説明に関与的なものを探らなければならない。‘パターン’や‘規則性’の概念は、この困難な問題の解決のための足場なのである。

ところで卓越性は、‘パターン’の構成要素であり、量的側面（頻度）と形式的側面（形）を持つパターンの、量的側面を司るに過ぎない。即ちパターンにおいては、その形式的側面が量的側面に優先するので、パターンとしての‘形式’が認識されれば、量的側面即ち卓越するものの頻度は二次的なものとなる。卓越性のこの量的な側面がそのテキストの特性や価値の判断に資する保障がないとすると、では、パターンの形式的側面はどうであろうか。ハリデーは、「或る特定のパターンが、‘そのゲームにおける価値’を持つか持たないかについて、形（フィギュア）は何も語らない」²⁶⁾ という。

例えば、或る詩の詩行末に終助詞「よ」と「な」が一定のパターンを成して現われているとしても、‘形’としてはこの助詞の構成は何も意味しないのである。我々は、この‘形’の要素である「よ」「な」が、その言語体系内でどのような機能を付与されており、かつまた、この詩における助詞がどのような規則を以って使われているかを知って始めて、この詩の「な」「よ」及びそのパターンについて、何かを語り得るのである。終助詞「な」「よ」の機能・規則を判断するのに、この詩でこの‘形’自体は何ら資するところがないはずである。勿論、言語の機能や規則はその使用を通して実現されるので、現実のテキスト抜きには判断できないことも事実だが、論理形式として一般的な扱いを受けるレベルの形式（形）を越えて、この‘形’というものを論ずることこそ、言語学的判断から一步踏み出してしまう一線であると考えられているのである。即ち、卓越性として取材された言語パターンの量的側面から直接そのテキストを語ることも、その‘形’から直接そのテキストを語ることも、ともに言語学的文体論の真のテキストへの関与性をあいまいにしてしまうことになるのである。

では、卓越性から前景化を論じる道は閉ざされているのだろうか。テキストの究極の価値は言語によっては与えられない、とする極点に立って判断を放棄しない限り、今日の発達した言語学は、この状況を説明するための多くの判断を約束してくれる。

我々は目下、「どんな類の言語的卓越性が、文体論的にレリヴァントかを決定する一般的基準

を持ち合わせていけない」。このため、とりわけ文体研究における意味論の位置を論じる必要が生じるとして、まずハリデーは、パターンの形式的側面（フィギュア）は何らかのかたちでその卓越性の‘有意味性’を限定する、と考えることから出発する。形式的側面は、直接テキストや文体の固有性を語るために使われるのではなく、一旦その形式的側面が表わすであろう文体的効果を言語の機能や体系との係わりで扱うべき対象とされるのである。そして、その場合の目的は、「より直接的に意味と関係するパターンがどの程度真実から離れているか」即ち「どんな要素が文法や語いにおける‘効果’の関与性を支配しているのか²⁸⁾」を探究することにある。

このような判断を経て始めて、文体的効果は、心理的・生理的レベルでの解釈から離れて、自由に、‘言語の機能や体系という潜在的意味の選択による意味内容の組織化としてのテキスト’における‘言語的事実’として論じられるようになるのである。パターンの形式的側面の中から言語の機能によって説明付けられるもの（言語の機能と関与的であるもの）を抽出したり、また、潜在的意味としての‘体系’との関与性で説明付けられるものを指摘したりすることが、ハリデーの具体的なテキスト分析や文体研究となって現われるのである。

以上、[prominence ← pattern ← foregrounding]という一つの軸に添って、この派の文体研究の方向を概観した。これは、テキストの特性に対して、言語学的判断の独自性を確保しながら、より詳細に、かつ厳密にその事実を説明しようというマイクロな方向への研究である。ところが、テキストの特性は、マイクロな分析によってのみ語られるものではない。個々の言語的事実・特性が一つの統一体としてのテキストとして組織されるには様々な段階・レベルがあるが、この様々なレベル及びレベル間の関係についても、同様に、言語学的説明を与える努力が成されるべきである。その意味で、今日テキスト言語学（text linguistics）という一分野が模索されていることを考えるとき、この派の60年代の成果として見落すことの出来ないものがある。‘一枚の言語組織体としてのテキスト’という視点から‘文章の連続性（シーケンス）の問題’として扱われた事柄がそれである。

R. ヤーコブソンに導かれた‘parallelism（平行性）’の研究はその一例であるが、この研究はこの派でもそのまま引き継がれている。ここでは、それを、‘規則性’‘パターン’‘前景化’といった本稿の文脈で、概略捉え直しておこう。

‘Where wealth accumulates and men decay.’

a) S + V and S + V ...

b) S { wealth } V { accumulates }
 men decay }

ところで、‘平行性’と‘機械的な反復’は区別されねばならない。リーチは、「どんなパレリステックなパターンにあっても、‘アイデンティティーの要素’と‘コントラストの要素’が存在しなければならない²⁹⁾」という。上の例文では、a) がアイデンティティーの要素、b) がコントラストの要素である。‘平行性’は、主にa)の要素によってその‘規則性’を所有するし、

この‘規則性’によって、我々は本来同一性を持たないものを同定することができる。ただ、a)とb)のどちらが他に優先するかは、記述のレベルを越える問題ではあるし、また、この例文のように、統語論的要素が‘規則性’を、語彙論的要素が、‘コントラスト’をもたらすなどと言うことは出来ない。その逆も常に行われるからである。そこで、この二つの要素が存在すれば、ひとまず、‘平行性’と考えるわけだが、消極的な定義をすれば、‘平行性’は‘機械的な反復’と大差ない。‘平行性’と敢えて呼称することによって認めようとする積極的な意義は、機械的な反復要素をベースに、意識的にコントラストの要素を構成しようとする作者の意図にある。‘アイデンティティーの要素’と‘コントラストの要素’とのどちらがより顕在的であるかも、ケース次第であり、要は、言語的事実としてみた場合、‘平行性’は、‘動機付けされた卓越性’を示すし、その意味で、‘前景化された規則性’と捉えることが出来る点が重要なのである。

さて、この‘平行性’の研究に加えて、もう一例、この派の主な研究テーマとなった‘コヒージョン (cohesion)’の問題についても、ここで簡単に触れておこう。

リーチは、音韻的パターン化について、その‘hierarchy of units’を、次のように例示している。³⁰⁾

‘The furrow followed free.’

- | | | | | | |
|----|----|------------------|------------------|----------------|------------------------|
| A. | θa | fʌ-rɒu | fɔ-ləʊd | fri: | phonemic transcription |
| B. | cv | cv-cv | cv-cvc | ccv | syllable structure |
| C. | x | / x | / x | / | rhythmic structure |
| D. | x | / _f x | / _f x | / _f | alliterative pattern |

この手短かな一例から推して、テキストの言語現象のヒエラルキーが、無数の記述可能性を有していることは想像に難くない。そこで我々の認識に照らして、また言語学を構成する基本的なレベルを前提にして、‘パターン’としては、例えば文法的パターンなら、文・節・句・語のレベルを、語彙論のパターンなら、形態素や意義素を、まず記述対象とすることになる。ところが問題は、‘hierarchy of units’が、個々に孤立しては意味を付与されて存在しないという点である。というのも、意味付与作用としての言語現象は、そこに常に、‘付与された認知的意味’を見い出すことが前提となるからである。このことは、‘パターン’の解釈の困難さを示すが、観点を変えれば、由来から音韻レベルでの‘パターン’の分析に言語学者が積極的に発言し得たのは、この音韻レベルが、殊に詩のテキストにおいてはかなり独立した価値を有していたことを反映しているし、また言語の音声面の意味からの独立性にも支持されていたことがわかる。新ファース派の一つの成果である‘コヒージョン’という考え方は、さらに、文法論レベル・語彙論レベルにおいて、パターンとして捉えられる幾つかのレベルの個々の現象を相互に結び付ける展望を与えたのである。

以下では、以上の‘破格観’の下に展開された具体的な分析の要点を検討してみよう。

3. J. Mch. シンクレア, 1966年の分析

まず, この派の言語理論を活用して, 一つの完成された文法的分析を提供したとされる³¹⁾, 1966年のシンクレアの分析³²⁾の要点を挙げて, この派の言語理論活用の基本線を確認したい。

FIRST SIGHT

Lambs that learn to walk in snow
When their bleating clouds the air
Meet a vast unwelcome, know
Nothing but a sunless glare.
Newly stumbling to and fro
All they find, outside the fold,
Is a wretched width of cold.

As they wait beside the ewe,
Her fleeces wetly caked, there lies
Hidden round them, waiting too,
Earth's immeasurable surprise.
They could not grasp it if they knew,
What so soon will wake and grow
Utterly unlike the snow.

Philip Larkin

(雪原を歩むことを覚えた子羊達, / そのメイメイ鳴く声が大気を曇らせるとき, / 彼らは, あまりのそっけなさに出会い, ただ雪の佻しいまばゆさを感じるだけである。 / 始めて柵を歩み出し, そこここを踏み迷いながら, / 彼らがみつけるものは, / ただみじめな冷たさの広がりだけである。 //

母羊の傍に佇む頃, / 母羊の毛並は固まって, / なおも佇みつづける彼らの回りには, / 大地の測り知れない驚異がひっそりと横たわる。 / たとえ, 彼らにそれがわかっていても, 捉えることは出来ない, / あまりにその雪とは違って, / 束の間に目覚め, 成長するものが。 //

- 筆者試訳 -)

【分析上の主な論点】

1) 文構造に関するもの

文構造の基本的分析のために, 二つの要素('free clause 自由句' と 'bound clause 拘束句')をもうけ, その生起状況を表示すると, Table I のようになる。[注] α : 自由句, β : 拘束句。但し, α , β といった, 文構造の分離した (discrete) 要素を形

TABLE I

Sentence Structure

Exponents of "a"	Line No.	Sentence structure/line	Exponents of "β"	Sentence structure
Lambs that learn to walk in snow	1	α-	When their bleating clouds the air	α[β]α
Meet a vast unwelcome, know	2	β		
Nothing but a sunless glare.	3	(-α)α-		
	4	(-α)		
All they find, outside the fold, Is a wretched width of cold.	5	β	Newly stumbling to and fro	βα
	6	α-		
	7	(-α)		
there lies	8	β	As they wait beside the ewe, Her fleeces wetly caked, Hidden round them, waiting too,	βα[ββ]
	9	βα-		
	10	ββ		
Earth's immeasurable surprise.	11	(-α)		
They could not grasp it	12	αβ	if they knew, What so soon will wake and grow Utterly unlike the snow.	αββ
	13	β-		
	14	(-β)		

TABLE II

Clause Structure

Exponent	Free	Bound	Rank-shifted
Lambs that learn to walk in snow / meet a vast unwelcome	S/ PC		SPA
that learn to walk in snow		ASPC	
When their bleating clouds the air			SP
know Nothing but a sunless glare.	P C	APA	
Newly stumbling to and fro			
All they find outside the fold Is a wretched width of cold.	SA PC		SP
they find		ASPA	
As they wait beside the ewe		SAP	SP
Her fleeces wetly caked			
There lies / Earth's immeasurable surprise.	SP/ C	PA	
Hidden round them, waiting too		PA	ASP
They could not grasp it			
if they knew,	SPC		
What so soon will wake and grow Utterly unlike the snow.		SAP A	

成しない句は、移行句 (rankshifted clause) と呼ばれる。

日常英語では、 $\alpha\beta$ の形が最も一般的で、一貫性のない $\alpha[\beta]$ や $\beta\alpha$ の形は稀である。この詩では、全4文のうち最後のものだけが $\alpha\beta$ で、他は α ないし $\beta\alpha$ ないしその両方のシークエンスである。

この詩における句連繋の一貫性のなさを少し丁寧にしてみると、例えば、 'wait' という語が二度生じるのは、自由句 (α) に先行する場合か、それを破壊する拘束句 (β) 内においてである。そこで、この 'wait' を含む一文のように、予言可能な自由句 (α) のその兆候が引き延ばされたり、その展開が破壊されたりする文の構造を指示するために、 'arrest' という用語を用いる。 'arresting' とは、文法的な予言性が用意されているときを、それに対して、文法的な予言性が残されていないときを 'releasing' と呼ぶ。すると、この詩の始めの三文は、 'arrested' だが、最後の一文は、 'released' である。第一文 ($\alpha[\beta]\alpha$) は、初めの α の展開が β によって破壊され、第二文 ($\beta\alpha$) はその α の兆候を引き延ばされる。第三文 ($\beta\alpha[\beta\beta]$) には、その兆候を引き延ばされ、展開を阻まれた孤立した α があり、第一文、第二文でみた、 'arrest' の両方の具現形 (exponents) が存在する。

2) 節構造に関するもの

主語 S (subject), 述語 P (predicator), 補語 C (complement), 付加語 A (adjunct) - 通常と、S と C は名詞群、P は動詞群、A は副詞群である - として、 $\text{'intruding clause (次の節へと貫入する節)'}$ が生じるところを (/) で、 $\text{'line boundary (詩行の境界)'}$ を (|) で示すと、Table II のようになる。

では、この詩での 'line boundary' (|) の意味・効果について考えてみよう。(4, 11 詩行のように) 文と文との間にこれが生じる場合は、その文法と '一致している' わけで、その効果は、文・文法の強調・強化であろう。ところが、節と節との間にこれが生じる場合、ないし何らかの下位ランクで生じる場合は、その意味は、用意されたその予言 (prediction) の性質に依存する。即ち、これが α と β の間に生じるなら、多くは、構造上の境界 (structural boundary) の強調・強化であり、この β の生起にショックを与えることはない。ところが、逆に、 β と α の間に生じる場合は、この β の予言を強化し、その 'arrest' を強化する。

3) 群の構造 (節の一ランク下位の構造) に関するもの

- 動詞群は、この詩では、最も単純で、殆ど全てが単一語、現在時制である。このため、最後の文でそうでないことがショックを生む。
- 副詞群も、殆んど卓越していない。自由節は補語を有するが付加語を持たないし、拘束節は付加語を有するが補語を持たない。この単純性がまたこの詩の一つのポイントとなる。例えば、この単純性を背景にして、 'Newly' という語の選択が、特記事項となるからである。

- 名詞群については、下の表を参照。(h = headword 主要語, d = deictic 指示詞, e = an adjective 形容詞, q = anything which comes after the headword 主要語に続くもの)

Nominal Group Structure

In subject	In complement	Rankshifted
hq (lamb <u>s</u> that learn to walk in snow)	dh (the air)	h (snow)
h (that)	dch (a vast unwelcome)	
dh (their bleating)	h + deh (nothing but a sunless glare)	dh (the fold)
hq (all they find)	dchq (a wretched width of cold)	h (cold)
h (they)	dch (earth's immeasurable surprise)	dh (the ewe)
h (they)		
dh (her fleeces)	h (it)	h (earth) dh (the snow)
h (they)		
h (they)		
h (what)		

名詞群の構造には興味深いものがある。`pre-head` となる数詞や名詞が一つもないし形容詞は少ない上に、一つ以上になることがない、しかも補語としてのみ使われる。また、主語は単純で、十のうち六つまでが単一の代名詞であり、他は、hq 構造が二つ、dh 構造が二つである。(dの具現形は、所有格指示詞 (their, her)であり、これら二つの dh 群は拘束節内の主語である。) また、ランク転位された名詞群は、他の名詞群の構成素として、ないし前置詞の目的語として生じ、その構造は単純で、非一所有格の指示詞の有無はともかく、単一語彙から成っている。

これに対して、補語は最も複雑で、単一の dh 構造は、唯一つ他動詞的拘束節の補語だけである。また予期されるように、単一の h 構造は、最後の一文にある。このことから、我々は形容詞を含む四つの補語について考えさせられる。というのも、これら四つが、この詩での `普通でない語の配置` の殆どを含むからである。

4) 語の構造に関するもの

この詩では、強い語彙的パターンはみられないし、現時点では、語彙的パターンの客観的記述が可能なほど語彙論が充実していないので、二、三の項目についてのみ言及する。

- `Newly` と関連して、`unwelcome` は、通常形容詞であり、形容詞の特性として `a` `an` を伴った群の主要語となることは出来ないはずである。そこで、その語を名詞と受け取らざるを得ない。この名詞群に特異な効果が生まれる所以である。
- 接辞についてみると、例えば、lambs, stumbling, clouds, lies, fleeces, といった `屈折` の語尾を伴った語と、他の語を区別することは実に容易で、この他の語のうち、wetly, newly, utterly, width, といった接辞を伴わない語の他に、また別の語のクラスを示すものが二、三ある。結論的に言えば、接辞がその語の意味に強い影響を

与えるものは, *unwelcome, sunless, immeasurable, unlike*, の四つぐらいである。ところが, この四つには類似性があり, それは, 'reversing affixes (逆転の接辞)' とでも名付けられそうで, 何らかの形でその語の残りの部分の意味を逆転する接辞である。この詩の四つの複雑な名詞群のうち, 三つまでがこの '逆転の接辞' を含んでいることや, 残りの一つ (*a wretched width of cold*) は, それ自体に, 'word-class affix' や普通でない語彙・文法を含んでいることは注目されてよい。(付け加えれば, この詩の最終詩行もまた, 'reversal 逆の' な様相を呈し, その構造は伝統的な技巧の一つ 'brush-off ぼかし' の構造を持っている。

以上, シンクレアの詳細な分析の中心を成すと思われる点だけを列記した。この詩は, 文法レベルの多くの点で単純であるが, 記述次第では実に多くの問題点を浮び上がらせることが出来ることが示された。振り返ってみるに, この分析の基本は, 文・節・群・語といった各ランクごとにその構造上の特性を記述するとともに, ランク転位の観点からランク間の関係を眺め, そうすることで, この詩の解釈の焦点になるとと思われる各ランクごとの特性を抽出したり, またその抽出したものを各ランクごとに再構成したりして, テクストの構造を説明しようとするところにある。分析の鮮かさに加え, 一つの言語理論の応用がどのようなものかを示した点で, 刺激的な論文だったのである。シンクレアは自ら, この分析について, こう語っている, 「文法は, すみやかに語彙的・文脈の問題に我々を導くが, ただバラバラの状態ではしかない。この短い詩の構造についても語られていないことがまだ沢山ある。(中略) 文法は, コントラストや, 同時に生じる実に多くの体系からの多様な選択を扱うのであり, 文法的説明の意味は, 全体的な文法的記述に照らしてのみ十全に引き出され得る。とは云え, この論文の試みは, この詩の意味の幾つかの様相が, 全く独立にいかにもその価値を記述出来るかを示している」³³⁾と。

さて, 以下の章では, さらに幾つかの分析の方法を検討するが, 主として '文法論的分析の展開例' (シンクレアの例では 1) ~ 3) のレベル) と '語彙論的分析の展開例' (同 4) のレベル) に分けて考え, まず, 後者の例からみていこう。

4. 語彙論から見た 1960 年代の方法と成果

シンクレアは, 先に引いた論文 ('66^a) の中で, 語彙的パターンを客観的に扱える程にはまだ語彙論が充実していないと述べていたが, 同じ66年に, 同時に発表されたハリデーとシンクレアの論文³⁴⁾が, この派の語彙論研究に一つの方向を与えることになる。そこでは, フェースの理論を引き継いだ 'set' と 'collocation' という考え方が, 研究の中心を成しており, テクスト分析や文体研究に語彙論研究がどう活用できるかの焦点もまた, ここに絞られる。そこで, まずこの 'set' と 'collocation' を巡って基本的な二人の考え方を確認することから始めよう。

ハリデー, シンクレア共に, まず基本的な論点として挙げるものが, 語彙論 (語彙的パターン)

と文法論（文法的パターン）とはパラレルに位置付けることが出来るという点である。語彙論は、「a）言語形式内では、文法が（文法的）意味論に対して成すのと同様の、（語彙的）意味論との関係に立脚していると考えることが、またb）文法を離れ、語彙的パターンが文法的パターンから、単にデリカシーにおいてだけでなくその種類においても異なったものとして取り扱われると考えることが、有効だ³⁵⁾」とハリデーは語り、文法論レベルとの関係に必要以上に神経を使わなくとも、独立した語彙論レベルが確保できることを論じている。一方、シンクレアも、例えば、語（item）が文法的限定からどの程度独立しているかについて、こう述べている、「文法はランク（階層）を有し、或るランクでは`free（自由）`であり、また或るランクでは`bound（拘束的）`である。例えば、形態素としての形式`the`は、`free`だが、即ち一語として独立できるが、一語としての形式`the`は`bound`である。というのも、名詞群としては独立し得ないからである。我々は、このランクという概念を語彙論に援用する必要はない、というのも、語彙論における唯一のランクは`the item（語というランク）`とみなし得るからであり、それ故`the item`は`free`なのである。`cats and dogs`の一部としての`cats`を関係付ける方法は何もない。`cats`はそれ自身`free`なのである」³⁶⁾と。二人のこうした判断を前提にして始めて、テキスト中の語彙を適当にピックアップして、突き合せてみるといった語彙研究の基本作業も保障されるのである。

ところで、抽出された語彙は、パラディグマティックな関係から見た場合、`set`（`lexical set 語彙集合`）という考え方を、またシンタグマティックな関係から見た場合、`collocation 項目連結`という考え方を引き出すことになる。

この`語彙集合`については、今までシーズンラスのカテゴリーにおいて、いささかの研究成果をみているが、例えば`動詞群`といった一般的な語彙論のカテゴリーは存在しそうにもないし、とりわけ一般的なものほど記述が困難になる。そこでまず、この`語彙集合`とパラレルに、言語学的にアレンジされた形での`項目連結`の研究から始めるのが適当であろう。というのも、この語彙分析の中心となる、妥当な語彙論的限定については、語彙がその項目連結的環境によって特定されることを前提にしなければならないからである。即ち、項目連結的限定の類似性が語彙項目を語彙集合にまとめる力を我々に与えるのである。換言すれば、「ちょうど、（`類`の）文法`体系`が`構造`との照合によって定義されるように、（語の）`語彙集合`は、`項目連結`との照合によって定義することが出来る」³⁷⁾のである。

かくて、`項目連結`の研究にこの派の語彙論は集中するが、では、この`項目連結のレベル`はどのように確保されるのであろうか、それをハリデーの挙げる例に従って見ておこう。

- (1) { * He drives a strong car. { strong tea
 He drives a powerful car. { *powerful tea

この場合、³⁸⁾ `strong`と`powerful`のパラディグマティックな関係は一定ではなく、それが生じるシンタグマティックな関係に依存している。これは、語彙研究にとっては、シンタ

グラマティックな関係が、いかに優先しているかを示している。では、このシンタグラマティックな関係は、文法構造に準ずるものと捉えていいのかどうか。次の(2)は、その反証である。

- (2) { strong- ' a strong argument. '
 strongly- ' He argued strongly. '
 strength- ' the strength of his argument. '
 strengthened- ' His argument was strengthened. ' }

この例を見てもわかるように、「strong' と argue' の項目連結的な関係に関する限り、単にそれが生じる特定の文法的関係で不適格であるというだけでなく、どんな文法的関係が生じるとしても、多分不適格である³⁹⁾」。即ち、この(2)の例は、項目連結的なものが、文法構造から一応独立して扱うことの出来るものであることを証明している。

以上、(1)と(2)によって、「項目連結レベル」が、必要にしてしかるべき位置を与えられる。

では、このレベルにおいて、「項目連結的な関係」はどのような方法によって捉えられるのか。「文法構造は階層的に秩序付けられている。そこで、人は、そのメンバーの個々が、一つの 'chain-exhausting unit' であるような 'ランク' の尺度を考えることができる。ところが、語彙論のためにこうした秩序立った階層を求めても有効だとは思われない⁴⁰⁾」。例えば、「語 'a' や 'of' は、構造的に限定され、デリカシーのごくわずかの段階で文法によって独自に特定される。また一方、項目連結的には、広く非限定的である。ところが、語 'strong' については、文法が、それがメンバーであるところの ('形容詞' の下位の) 類を独自に特定することは出来ても、この類内でその語自体を特定することは出来ない。またそれは、その類のメンバーからそれを区別するための構造上の限定を何も持たない (かつまた、仮に、その '同系' の 'strength' 等のメンバーが、一つの単一な語として項目連結的に作用することになった場合、この合成された語は類のメンバーとして特定することすらむずかしい)。しかしながら、項目連結的にそれは限定され、このことが一つの独自の語としてその特定化を許容するのである。ここには、語が '最も文法的なもの' から '最も語彙的なもの' まで並べ得る尺度が存在するようで、この尺度での語の位置は、その全般的な頻度ランクと関係付けられる⁴¹⁾」。そこで、「構造の高度に抽象的な関係 (ここでは、一つの要素の価値は、どんな意味においても、単純なシークエンスには環元されない複雑な要因に依存している) に代って、語彙論は、或る尺度ないし或る切点を持った何らかの有意味な近接性のメジャーによって、線的に共起するものの単一な認識を必要とする。 '項目連結' として照合されるものが、このシンタグラマティックな関係なのである⁴²⁾」。

では、ここに言うところの '尺度' は、どのように扱われるべきであろう。シンクレアは、目下、この点での分析のテクニックは実にお粗末なものだ、⁴³⁾ と言う。しかし、この '尺度' について研究を深めることは、とりもなおさず、現実のテキストの語彙構造の分析を進めることであった。そして、この分析の途上で、テキスト分析・文体分析の新しい観点が幾つか見いだされた

のである。次に、この種の成果の中から二点だけ取り挙げ、この派のその後の展望を瞥見したい。一つは、語彙の予言性として捉えられる或る力、及びその力の及ぶ範囲の研究（シンクレア）であり、もう一つは、‘コヒージョン cohesion’ という考え方から成された語彙レベルの分析（ハリデー）である。

① 語彙の予言力（シンクレア）

‘テキストの語彙の構造’を記述しようとする困難な作業の第一歩は、最もこの記述が可能となるような‘語彙のパターン’の捉え方を検討することから始まる。ところで、語彙のパターンは、そのパターンの特定の環境によって（即ち、語彙同士の関係として捉えたとき）、テキストの様々な拡がりを越えて存在している。その理由は、文法的パターンと語彙的パターンをパラレルに位置付けることによって、語彙的パターンのシンタグマティックな関係を、形式意味から独立させて考えることが出来るからである。より断定的に言えば、語彙的パターンのシンタグマティックな関係を記述することは、その文脈の意味を記述することに他ならない。換言すれば、語彙的パターンをそのテキストから分離するということは、そのテキストに固有の、語彙同士のシンタグマティックな関係を、パラディグマティックな関係によって説明することと変わらないのである。‘項目連結的レベル’が独自に確保されるということは、このシンタグマティックな関係を形式意味から分離することが可能であることを意味している。これは、逆に、語彙的パターンに形式的側面が存在するとしても、それは文法的パターンとして説明されることを要求されるということでもある。（この矛盾は、形式意味の概念の曖昧さから生じると思われる。）以上のことから、‘語彙のパターン’即ち項目連結的レベルでのシンタグマティックな関係は、‘形式’ではなく‘量’の問題に環元される、即ち計量的にしか表現されないことになる。勿論‘計量的’とは、ここでは、語彙同士の使用頻度ということである。

シンクレアが、語彙の予言力と考えるものは、この語彙同士の使用頻度（＝可能性・蓋然性）に他ならない。

ところで、彼は、語彙同士が生み出す‘相互予言（a mutual prediction）’の実は、次の事柄に依存すると考えている⁴⁴⁾。

- a) 相互に及ぶ語彙項目の予言性の強さ b) 語彙項目間の距離 c) それらの語彙項目を分離する語彙の性質 d) 文法的組成（力）

まず、この四つの項目のうち、最も直接的な対象になる語彙項目間の物理的距離については、その近接性を査定することが有益な判断を提供するように思われるかもしれない。ところが、結局は、「近接性を測るグラウンドは与えられないし、具体例での研究の結果からは、語彙項目がそれらの距離が増大するにつれて、着実に相対的に、予言性が稀薄になるということが否定されがちである。そこで、まずは、項目連結の選ばれた境界内での近接性の度合いが基本的に重要であるとの考えを拒否すること」が好ましい。彼はこう判断して、語彙項目間の距離について、次のような基本的な考え方を提示する。「研究対象となる項目連結の語について‘node’という用

語を用い、一つ `node` の両サイドにあって、この `node` と関与する語彙項目の数を、`span` と定義する。語 (node) は、その環境内で我々が `collocates` (併置された語) と呼ぶその `span` によって、設定される。`span` の拡がり、目下のところ任意的で、主として実際的な考察に依存している⁴⁶⁾。

彼はまた、語の予言的性質については、`cluster` (連らなり) という用語を使って、その考え方をこう説明する、「我々は、一つの語が別の語の生起を予言する方法と、それが別の語によって予言される方法とを共に測っている。そこで、語の語彙的意味を説明する場合は、後者の方法を選ぶことにする。この説明は、`a cluster` と呼ばれ、その全般的な環境を表わす図表から導かれる。」「『例えば、`夜` の意味の一つは、`闇` を伴ったその語の項目連結性であり (ファース)、語 A の `形式意味` は、その近くに B, C, D が生じる強い傾向を有するとか、E, F とは強くないとか、G, H, I とはわずかであるとかいうことであり、正しくは、その `cluster` 内での図表上に位置付けされたものである』⁴⁷⁾。

語彙がその予言力によってどのように結束しているかを検討するための、以上の二つの観点から、さらにもう一つ押えなければならぬ問題が生じる。それは、或るテキストにおける一つの語彙の使用が、`casual` (偶然のもの) か、`significant` (有意義なもの) か、という点である。或る語彙のその言語体系内での一般的な予言力というものを想定することは覚束ないことであるが、しかし、現実に使用される語彙にこの区別をもうけようとするのは、この予言力論議を一步深めるにちがいない。彼は、「`casual` な項目連結と `significant` な項目連結の有効な区別は、その語彙項目の度数の生起内での `collocates` の反復度数によって、成される⁴⁸⁾」として、そのテキスト内に生じる或る語彙項目の生起の蓋然性 (= 予言性) を、次のように定義する。

{ p : テキスト内に生じる語の全体数, f : 或る特定の語彙項目の生じる全体の数 } とすると、そのテキスト内での各語の位置で生じるその語彙項目の蓋然性は、 $(\frac{f}{p})$ である。

また、{ s : `span`, (これは、或る `node` の両サイドでの語の位置の数で測るので、s は 2 の乗数である。) } とすると、各々の連続する `node` と項目連結する、問題にしている語彙項目の蓋然性は、 $(\frac{sf}{p})$ である。

そこで、{ そのテキストに或る特定の `node` が n 度生じる } とすると、この `node` と項目連結する、問題の語彙項目の蓋然性は、 $(\frac{nsf}{p})$ である。

ここに示された方法による「統計的検討は、(その `collocate` がその `node` をそれ自身へと導く) 正の相関や、(その `collocate` がその `node` を追い払う) 負の相関ないし項目連結の欠除を示すので、予言される数値と現実の数値との間のどんな不一致も査定することができる⁴⁹⁾。勿論、具体的な研究を進める上では、「テキストに記された全ての語の `cluster` を整理したり、その `cluster` の無意味な `細部` を取り払う方法を工夫したりしなければならない⁵⁰⁾。とはいえ、ここに示された基本的な考え方は、テキストの語彙の

構造へのアプローチの有効性を予感させるだけでなく、'破格・逸脱'という観点で振り返ってみると、'項目連結的レベル'での語の連続性をベースにして、或る語の蓋然性、予言性を問題にできることで、語彙使用の異常性(逸脱状況)もかなり新しい観点から記述できる。

② 語彙レベルでの分析例(ハリデー)

ハリデーの語彙論レベルの分析には、二つの観点がある。一つは、'コヒージョン'の分析で、他は、'群の構造'の分析である。もっとも、例えば、「ある詩における全ての節のうち10分の9までが'疑問詞'のクラスに属する、といったことを示すことには興味がないし(もし、これが'法'の体系内でのこれまたは他の語の生起の可能性といかに関係するかがわからないなら⁵¹⁾」と語る彼の意図からも理解出来るように、体系ないし機能との関係に裏打ちされない判断は、説明能力やその妥当性を充分与えられない。そこで、ここに挙げる二つの事柄も、実は、語彙論レベルだけで確保された判断として独立したものではない。加えて、問題にする彼の二編の論文は、60年代の前半に発表されたものであるため、その個々の判断も、今日の成果からみると、いささか曖昧な点もある。次回に60、70年代の文法論レベルの分析を扱うときに、もう一度これらの論文(殊に、W. B. イエイツの詩'レダと白鳥'の分析)を取りあげるので、詳細は、そちらに譲りたい。ここでは、この時期の成果として、一応語彙論レベルの分析の可能性を示すものだけを、簡単な説明に代える。

a) 周知のように'コヒージョン'の考え方は、拡散しがちな様々なレベルでの記述及びカテゴリーに、統合的視座を与えようとするもの⁵²⁾で、後日、R. ハーサンとの共同でまとめられたこの研究によると、文を越える'文と文との意味上のシンタグマティックな関係'について、この用語が使われる。その場合、'文法的コヒージョン'と'語彙的コヒージョン'⁵³⁾の二つが大別される。(本来が、文のレベル(形態素、語、句、節)でのシンタグマティックな関係もこの考え方で包括することは可能であるが、テキスト中の構造的に無関係な要素に意味上の連続性を確認するために、便宜的に'文を越えたレベル'での分析に限ってこの用語を充当させるのである。)

'語彙的コヒージョン'には、三つの種類がある。1) 文法的コヒージョンに最も近いもので、一般的な物や人を表わす語に定冠詞がつくと、指示詞と同様の働きをして、コヒージョンが形成されるもの、2) どんな単語でも、繰り返されたり、同意語が生起したり、総称的な語が生起したりすることで、コヒージョンが形成される場合(reiterativeなもの)、3) 語の配置上の特権的生起によって同定される、即ち語の配置上、類似の傾向をもつ語の生起によって生じるコヒージョン(collocationalなもの)、の三つである。この三つの分類のうち、1)や2)は、現にこれまで、特定の言語理論に依らない形で、文学作品の分析上色々論じられていることを考えると、先でハリデーとシンクレアが語彙論研究とその記述の必要性を説いたことが思い合せる。その意味で、殊に3)の'collocationalなレベル'での研究は、今後の作品分析に有効な視座を与えるだろう。

例えば、64年の論文での、イエイツの詩の分析では、'動詞的な語の分析'を分析して、動詞的役割よりも名詞的役割を負わされていると思われるものを選び出し、これらの語が、そのテキストでの効果として持つ'パワー power'を論じている。一般的に、「語彙論的パワーは、高い蓋然性をもった配置における限定性の程度である、即ち、所与の語彙がそれとともに配置されそうな語が少なければ少ないほど（言い換えれば、所与の語がより強く或る別の語と結びつけられる傾向にあれば）、より'パワフル'である」⁵⁴⁾。こうした観点から、語彙論レベルの判断を付加することで、動詞一つの働きが、二つの観点で分析されるのである。即ち、その動詞が、どの程度'verbal 動詞的'か、という点と、どの程度'語彙論的にパワフルか'という点からである。そしてハリデーの目的は、この二つの判断を関係付けることで、'語の効果'を論じるところにある。

b) 群の構造を研究することで、名詞群のパターンや動詞群のパターンが、テキストの形成にいかに関わっているかを記述する方法がある。動詞群のパターンについては、a) でみたような結果を導くための前提作業として扱われているので、ここでは、名詞群の問題に限って言及する。

(名詞) 群の構造を研究することは、ある程度まで、文法論的な分析を含むことになるが、その結果から判断されることは'語彙を巡ってのパターン'の問題となるので、敢えてここで取りあげる。(それは、ちょうど語彙的コヒージョンの分類1)のように、多分に文法的であるものを語彙論レベルで扱うのに似ている。) 方法としては、英語の名詞群(節の一ランク下の名詞的構造)の基本構造を、(M)H(Q) (M: modifier 修飾詞, H: head 主要語, Q: qualifier 定限詞)と考え、テキストに生じた全ての名詞群の構造を分類する。そして、その分類によって、名詞群の生起状況やその特性(これは他のテキストとの比較を必要とするが)を考察しようというものである。勿論、その場合、単に名詞群を分類するだけでは、どのタイプが多い少ないという量的な判断しか与えられない。そこで、ハリデーは、そのテキストの構造の分析に有効な関連性をもたせるために(即ちそのテキストの特性との関与性を付与するために)、一例として、(M)の中でも'cohesive'な'定冠詞'の機能による分類を試みている。

以上、a), b)の他に、ハリデーは、語彙レベルの分析の観点として、'節構造内の主語としての名詞群内での語彙の分布'や'色彩や嗅覚に係わる語彙集合からの使用状況の分析'などがある⁵⁵⁾と述べている。

【後記】

本稿は、1960年代の新ファース派の言語学的文体論を、次の構成で検討するもの前半に当たる。1. はじめに 2. 1960年代の破格観 3. J. Mch. シンクレア、1966年の分析例 4. 語彙論からみた1960年代の方法と成果 5. 文法論からみた1960年代の方法と成果 6. W. B. イエイツの詩の分析例 7. まとめと1970年代への展望。5. 6. 7. の章は次回に

譲りたい。

【注】

- 1) See, R. Ohman, 'Generative Grammars and the Concept of Literary Style,' Word, 20 (1964) pp. 424-439.
- 2) N. E. Enkvist, Linguistic Stylistics, Mouton (1973) pp. 81-82.
- 3) M. A. K. Halliday, 'Categories of the Theory of Grammar,' Word, 17 (1961) pp. 244-245.
- 4) See, N. E. Enkvist, op. cit., (1973) p. 50.
- 5) See, S. R. Levin, 'Internal and External Deviation in Poetry,' Word, 21 (1965) (拙稿「教材分析のための破格論 (I)」『人文科教育研究Ⅷ』 pp. 13-14.)
- 6) 村田勇三郎, 「現代英語の諸相」(『文法論 I』現代英語学大系 3. 大修館書店 1972, pp. 287-292.) 参照.
- 7) G. N. Leech, A Linguistic Guide to English Poetry, Longman (1969) P. P. 42-52.
- 8) J. Spencer and M. J. Gregory, 'An Approach to the Study of Style,' (1964) in Linguistics and Literary Style, (ed.) D. C. Freeman, Holt, Rinehart and Winston, Inc. (1970) pp. 84-85.
- 9) G. N. Leech, op. cit., (1969) pp. 23-24.
- 10) N. E. Enkvist, op. cit., (1973) p. 98.
- 11) M. A. K. Halliday, 'The Linguistic Study of Literary Texts,' in Proceedings of the Ninth International Congress of Linguists, (ed.) Horace G. Lunt, Mouton & Co. (1964^a) p. 305.
- 12) S. R. Levin, op. cit., (1965) p. 226.
- 13) M. A. K. Halliday, Explorations in the Functions of Language, Edward Arnold (1973) p. 103.
- 14) J. Spencer and M. J. Gregory, op. cit., (1970) p. 77.
- 15) See, J. Mukařovský, 'Standard Language and Poetic Language,' in A Prague School Reader on Esthetics, Literary Structure, and Style, selected and translated by P. L. Garvin, Georgetown Univ. Press (1964) pp. 17-30.
- 16) G. N. Leech, op. cit., (1969) pp. 57.
- 17) G. N. Leech, "'This Bread I Break"—Language and Interpretation,'

- in Linguistics and Literary Style, (ed.) D. C. Freeman, Holt, Rinehart and Winston Inc. (1970) pp. 127-128.
- 18) M. A. K. Halliday, op. cit., (1973) p. 112.
- 19) G. N. Leech, op. cit., (1965; 1970) p. 127.
- 20) M. A. K. Halliday, op. cit., (1973) p. 113.
- 21) Ibid., p. 113.
- 22) Ibid., p. 112.
- 23) Ibid., p. 115.
- 24) See, M. A. K. Halliday, op. cit., (1973)
- 25) See, M. A. K. Halliday, 'Notes on Transitivity and Theme in English,' Journal of Linguistics 3, (1967) pp. 37-81, pp. 199-244; 4, (1968) pp. 179-215. 及び, M. A. K. ハリデー 「言語構造と言語機能」(J. ライオンズ編著「現代の言語学(上)」田中春美監訳, 大修館書店, 1973 pp. 187-234) 参照.
- 26) M. A. K. Halliday, op. cit., (1973) p. 116.
- 27) Ibid., p. 103.
- 28) Ibid., p. 117.
- 29) G. N. Leech, op. cit., (1969) p. 65.
- 30) Ibid., p. 62.
- 31) M. Coulthard, An Introduction to Discourse Analysis, Longman (1977) p. 170.
- 32) J. Mch. Sinclair, 'Taking a Poem to Pieces,' (1966) in Linguistics and Literary Style, (ed.) D. C. Freeman, Holt, Rinehart and Winston Inc. (1970) pp. 129-142.
- 33) Ibid., p. 142.
- 34) M. A. K. Halliday, 'Lexis as a Linguistic Level,' in In Memory of J. R. Firth, Mouton (1966) pp. 148-162.
- J. Mch. Sinclair, 'Beginning the Study of Lexis,' in In Memory of J. R. Firth, Mouton (1966^b) pp. 410-430.
- 35) M. A. K. Halliday, op. cit., (1966) p. 148.
- 36) J. Mch. Sinclair, op. cit., (1966^b) p. 422.
- 37) M. A. K. Halliday, op. cit., (1966) p. 156.
- 38) Ibid., p. 150.
- 39) Ibid., p. 151.

- 40) Ibid., p. 156
- 41) Ibid., p. 155.
- 42) Ibid., p. 153.
- 43) J. Mch. Sinclair, op. cit., (1966^b) p. 413.
- 44) Ibid., p. 413.
- 45) Ibid., p. 414.
- 46) Ibid., p. 415.
- 47) Ibid., p. 417.
- 48) Ibid., p. 418.
- 49) Ibid., p. 418.
- 50) Ibid., p. 419.
- 51) M. A. K. Halliday, 'Descriptive Linguistics in Literary Studies,' (1964^b) in Linguistics and Literary Style, (ed.) D. C. Freeman, Holt, Rinehart and Winston, Inc. (1970) p. 69.
- 52) M. A. K. Halliday, op. cit., (1964^a) p. 303.
- 53) See, M. A. K. Halliday and R. Hasan, Cohesion in English, Longman. (1976)
- 54) M. A. K. Halliday, op. cit., (1964^b; 1970) p. 63.
- 55) Ibid., p. 66.